The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	創成期の金平浄瑠璃 : 金平誕生期の連作物の競演
Author(s)	秋本, 鈴史
Citation	語文. 1985, 45, p. 22-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68730
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

創成期の金平浄瑠璃

——金平誕生期の連作物の競演——

秋本鈴史

一

金平浄瑠璃は、浄瑠璃史上初の創作と呼び得る作品であったと共に、戯曲内容の面においても新生面を切り開いたものとして、従来の古浄瑠璃史においても評価されてきた。が、この金平浄瑠璃が具体的にどのように作り出されたかという事になると、必ずしも十分明らかになっているとはいいがたい。

この金平浄瑠璃成立の問題に関して、先に「金平浄瑠璃成立の基盤」と題する拙稿を発表した（「語文」第四十三輯）。金平物の成立を当時の浄瑠璃界の動向から考えようとしたものであり、特に連作物の浄瑠璃に注目し、この連作物の流行が金平物を生み出す一つの基盤となったのではないかとした。その際、金平物が連作として作られたという事については結論だけを用いるに留まり、連作の具体的な実態については殆どふれる事ができなかった。それは金平物が他の連作物と異なり、創作性という新たな側面を持つ事から、詳細な検討を必要とすると考えたからであり、別に発表の用意がある事を予告しておいた。

本稿はこの連作問題を中心に、創成期の金平浄瑠璃について考察しようとするものであり、特に金平等の子四天王が登場する前後の時代を問題としたい。が、先稿でも述べた様に、金平物が連作として語り出されたという事自体は、既に室木弥太郎氏によって指摘されている事である。この室木氏の論は、金平物の創作法に関する唯一の指摘であるにも関わらず、その後検討される事のないまま現在に至っている。それは当時の正本や資料が極めて少ないという事もあろうが、連作という事に関して、「要するに観客の好みに対応した工夫」（『古浄瑠璃正本集』第七解題）という程度で済まされ、あまり関心が向けられなかった為ではないかと思える。しかし今、金平等の連作問題も、先稿で述べた当時の浄瑠璃界全体の動向と関連付けて、再検討する必要があると考える。

従来の金平浄瑠璃論の多くは、代表的な作品の戯曲構造の分析を通して画期性を論じるというやり方をとってきているが、金平物という作品群全体の輪郭や、それと当時の他の浄瑠璃との関係といった事は、必ずしも明瞭ではなかった。そこで連作という観点からの考察によって、金平物の全体像を提示すると共に、改めて古浄瑠

璃史の中での意義を考えようとするのが、本稿の目標とするところである。こうした意味で本稿は、明暦・万治頃の連作物浄瑠璃についての二部作の第二部に相当するものであり、先稿も併せて参照いただければ幸いである。

二

親四天王物も含めた広義の金平物の連作について、室木弥太郎氏は次の様にまとめておられる。(『語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』)

和泉太夫時代の彼は、「清原右大将」から「金平さいご」に至るまで、四天王物あるいは金平物に相当するシリーズを矢継早に発表した。明暦三年(一六五七)頃から寛文二年(一六六二)七月迄に至る約五年間である。

親四天王の由来から、子四天王時代に移り、遂には金平が死んでしまう迄が、比較的短期間の内に、江戸の和泉太夫によって語られたとするのが室木氏の論の主旨である。また作品相互の具体的な関係については『金平浄瑠璃正本集』の解題で指摘されている。

氏はこうした連作関係を正本の詞章内容の関係から決定された。一般に金平浄瑠璃では一作品内で物語が完結し、その内容も類型的なものであるが、「以前にこうした叛乱事件があった」という形で先行作の内容にふれる事があり、それで作品の順序を決めることができるのである。

ところがその場合問題となるのは、順序を決める根拠とされた現存正本の刊行時期である。その正本が連作当時の本でなく、後の時代の刊行になるものが多い。そこで室木氏は別の根拠として、『松平大和守日記』の万治四年二月十三日の条の浄瑠璃草子列記を挙げられた。後の刊行になる現存本の題名が、浄瑠璃本列記の中のものに一致するか、類似しておれば、その本の元版が万治四年二月以前に刊行されたと推定されるからである。しかしその場合にも残る問題は、後の刊行になる現存本の詞章内容が、万治頃の元版と同一といえるかどうかという点にある。

この問題は、連作全体に関わる大きな問題である。というのは、どの作品が当時連作として語られたかという事についても、必ずしも十分には確定し得ない事になるからである。室木氏も、後に自身の考えに一部修正を加えられているようであるが、それもこうした点からであろう。[1] このように連作説には、最も基礎的なところに問題を残している事になるが、当時の正本の多くが失なわれた現在、これを直ちに解決するのは極めて困難であろう。そこで金平物の連作にはこうした問題がある事を念頭において、まず現在残る正本、特に連作とされている正本の詳細な再検討が必要ではないかと考えられる。そしてどの作品が連作として語られたのかを整理し、連作とされているものの実態を解明していく事を通して、この問題も改めて考えていく事にしたい。

こうした再検討を行う際、本稿では特に子四天王の名称の相違という事を問題とする。以前より子四天王の名が作品によって相違する事には気付かれていた様であるが、「子四天王は当時の創作であるから、名称がまちまちになるのは当然の帰結である」(室木氏・前掲書)とされる程度で、その相違が起こる原因や背景に言及される事はなかった。そこで子四天王物の連作の内、「北国落」に続くとされた「紫野合戦」の場合をとり上げて、子四天王の名称が何故に問題となるかを具体的に考えてみたい。

「紫野合戦」の伝本としては、次の二本の江戸板の存在が知られている。

（甲）『四天王紫野合戦』　東大図書館蔵　（『金平浄瑠璃正本集』第二所収）

（乙）『八幡太郎誕生記』　原本亡失ヵ　藤屋新板　（『新群書類従』第九所収）

この両本は殆ど同一内容であり、詞章も近い。これが「北国落」の続篇とされるのは、この作品で叛乱を起こすのが「めうゑい（明永）五年八月十七日に、あくぎやく（悪橘）に身をほつせし、あさ日（朝氏）将ぐんたちはなのもろうぢが三なん、うへもんのぜうぢます」（甲本二段目、乙本との異同を補記）であり、このうぢますの父、もろうぢの謀反を内容とするのが「北国落」であるからである。

この「北国落」には万治三年六月刊の江戸又右衛門板の和泉太夫正本が残る所から、「紫野合戦」も万治三年頃に語られた事が推定されている。『大和守日記』にも「むらさきの合戦」の書名がみえ、その右肩には「きん平有」という小書まである。

さて、大筋では一致する両本であるが、部分的にはかなりの異同もみられ、正本集の解題でも問題にされている。が、内容の違いが論じられても、子四天王の名称の相違には全くふれられていない。両本共に冒頭部に登場人物が紹介され、主君の源頼義以下四天王等の名が挙げられている。甲本には一部破れで読めない部分もあるが、他の箇所で補ってその名称を比較してみる（上が甲本、下が乙本）。

三田源氏左衛門武綱　　三田修理太夫竹綱
坂田兵庫金平　　坂田兵庫守金平
卜部蔵人末春　　卜部権少輔末宗
碓氷刑部左衛門貞景　　碓氷玄蕃貞兼
平井一人武者保明　　平井清春

それぞれの官職名にも相違がみられるが、名前だけを比べても五人の内、三人の名が異なる。渡辺綱と坂田金時の子は、それぞれ武綱・金平とあり共通するが、（表記の上では「竹つな」や「公平」とも記されるが）、卜部末武、碓氷貞光、それに一人武者平井保昌の子供の名前が揃って違っている。この両本の名称の相違を区別する便宜上、卜部末武の子の名を使って甲本系を「末春系」、乙本系を「末宗系」と呼んでおく。

ほぼ同じ内容を持つ二本の間で、人物の名称にどうしてこの様な相違がみられるのであろうか。従来はこれが問題とされなかったのであるが、それは現在伝わる本がいずれも連作当時の本でなく、(2) 脇役の名前の相違などは後の時代には起こりうる小異とされた為ではないかと考えられる。現に甲本では全篇にわたって「末春系」の名称を用いながらも、一箇所だけ「すへはる」とあるべき名を「すへむね」と記すという混乱をみせている。

ところが、改めて子四天王の名に注目して金平浄瑠璃を見直すと、「紫野合戦」にみられた名称の系統的な相違が、子四天王が初めて作り出される頃から既に存在していた事が判る。

子四天王が登場する浄瑠璃の中で、刊年の判明する最も古い正本は、万治二年七月、江戸通油町伊勢屋板の『四天王むしや執行』である。この作品での子四天王の名をみてみると、源次郎・金平・末春・貞景・一人武者とあり、これは「紫野合戦」の甲本でみた「末春系」とほぼ一致する。

この本の刊行から八ヶ月後の万治三年三月、上方で二種の四天王

物が刊行される。山本九兵衛板の井上大和少掾正本『公平末春いくさろん』と、喜右衛門板の伊藤出羽掾正本『てんぐのはうち』である。[3] まず『いくさろん』の登場人物名に注意すると、武綱・金平・末春・貞景・保明とあり、これは『むしや執行』と同じ「末春系」である事が判る。

また『てんぐのはうち』の方をみると、武綱・金吉・末重とあり、これは金平の名を「金吉」とするように明らかに別系統と考えられ、従来からも区別されてきている。一応この系統も末武の子の名を使って区別する事にし、「末重系」と呼んでおく。

更に『いくさろん』等の刊行から三ヶ月後、江戸で『北国落』が刊行される。これは先述したように和泉太夫正本であり、子四天王物の連作の最初の作品とされているものである。ところがこの作品での子四天王の名をみると、武綱・金平・末宗・貞兼・清春とあり、これは「紫野合戦」の乙本でみた「末宗系」の名称に完全に一致している。

このように子四天王が初めて舞台に現われたと思われる万治二年七月から、万治三年六月迄の僅か一年足らずの間に、「紫野合戦」でみた二系統を含め、少なくとも三系統の子四天王の名があった事になる。整理すると、

(末春系)　武綱・金平・末春・貞景・保明
(末宗系)　武綱・金平・末宗・貞兼・清春
(末重系)　武綱・金吉・末重

という事になる。そしてこれらの系統の作品相互の内容的な関係をみると、この名称の相違という事が子四天王物の創成に直接関わる問題である事がより一層はっきりしてくる。

『むしや執行』と『いくさろん』とは共に「末春系」の作品であると考えられるが、人物関係や時代設定の面ではかなりの懸隔がみられる。『むしや執行』は親四天王から子四天王へ移る時代を描いているのに対し、『いくさろん』では登場したばかりの子四天王の内、既に二人が死んでおり、金平も「今は年たけて」という時代を語っている。『いくさろん』とは名前の系統の異なる『てんぐのはうち』をみても、時代設定や人物関係の面では『いくさろん』とほぼ同じであり、少なくとも万治三年三月の時点の上方では子四天王の二人は死んでいた事になる。しかしこれでは飛躍があり過ぎるのではないか。この間を繋ぐ浄瑠璃、例えば二人の死を扱った浄瑠璃があってもよさそうに思える。

そして確かにこれらの間の時代を舞台にした作品がある。それが室木氏のいわれる「北国落」以下の子四天王物の連作である。『北国落』では「五人の若殿原」が揃って登場する上、連作の中には『いくさろん』では死んでいた二人(貞光と一人武者の子)の死を語る作品も含まれていたと考えられる。内容の上では確かにこれらの作品は『むしや執行』と『いくさろん』の間にくる事になるが、『北国落』の刊行は『いくさろん』より三ヶ月も後であった。では『北国落』等の作品が『いくさろん』よりも先に上演されており、正本の刊行が逆になっただけかというと、どうも問題はそんなに単純ではないらしい。というのは『北国落』での子四天王の名称が『いくさろん』とは違っていたからである。

この様にみてくると名称の系統的な相違が、作品の成立順序や連作の時期の問題にも関わってくる事になる。この問題を更に考えていくには、『北国落』以下の連作において子四天王の名称がどうなっ

ていたかを検討する必要があろう。『北国落』に続くとされた「紫野合戦」では、「末春系」と「末宗系」の両系統の本が共に伝存していたのである。

三

子四天王物の連作とされているものの内、『大和守日記』で書名の確認できる「武綱さいご」までについて、その現存本と考えられているものを、登場人物名に注意して整理してみた。その人物関係をまとめたのが次の〔表〕である。

先述した様に、万治の連作当時の正本は『北国落』以外には殆ど残っておらず、[4] 今検討している本の中には、連作時から約三十年以上も後の貞享や元禄の頃に刊行された本も含まれており、江戸板と上方板も混在している。が、それらの正本もこのように整理してみると、内容面での連続性はもとより、人物関係の面でも緊密な連関性をもっている事が判ってきた。一部に現在みる事のできない作品もあるようであるが、こうした内容の作品が一連の連作物として、万治頃に語られていたと一応考えてもよいのではないかと考えられる。

そしてこの連作での子四天王の名称は、『北国落』と同じ「末宗系」の一系統であったらしい事も判ってきた。連作として語られている間に、登場人物の名が変わるということはなかったようである。そうすると「紫野合戦」の場合においても、「末宗系」の乙本の方がより連作時のものに近いのではないかと推定される。[5]

〔表〕からも判るように、この連作では子四天王達が次々と討死し、

大和守日記	現存本	主君	四天王（子四天王・孫四天王）				武知・三浦	叛乱者
北国落	北国落	頼義	武綱	金平	末宗	貞兼	一人武者 清春	橘もろうぢ
むらさきの合戦	八幡太郎誕生記	頼義―八幡太郎	武綱	金平…景政	末宗	貞兼	清春	（子）うぢます
たけち合戦	武知合戦	頼義	武綱	金平	末宗	貞兼	一人武者 死	川瀬宗親
ちりやく もんだう	わたなべ ちりやく打	頼義	武綱	金平	末宗	貞兼	武知 三浦	広田入道 ごうせん・宗親
						（貞兼 死カ）		
やはぎ かつせん	やはぎ合戦	頼義	武綱	金平	末宗 死	（貞兼）―貞春	（一人武者）―清氏	源頼親
天狗 もんたう	よりちか 二どのぎやくしん	頼義	武綱	金平		貞春	清氏	頼親 にら山 しやうげん
						（貞春 死カ）		
武綱さいこ	武綱さいご	頼義 義家	武綱 死 ―武春 武満	金平 景政			清氏	武知 三浦
								かみばら ときかつ

それに変って登場してきた孫四天王の中にも死ぬ者がでてくる。そしてこの様に次々と死ぬ人物が、名称に相違があるとして今問題にしている人物達である。従来はこれらの人物は脇役という事で問題にされることもなかったが、連作という立場で考えれば、これらの人物もまたそれぞれ重要な役割を果たしていたのではないかと考えられる。それはこの連作が、これらの人物達を次々と殺していく事で形成されていたと思えるからである。

例えば「たけち合戦」と「ちりやく問答」(共に『大和守日記』の書名)は、子四天王の一人である一人武者の死を中心とした続き物になっていると考えられる。『たけち合戦』は、九州での川瀬蔵人宗親の謀反に対し、若武者の武知源太が立ち上がる事を主内容とするが、[6] 四段目で宗親追討にただ一人向かった一人武者が、毒酒の計略の為に死んでしまう。その続篇とされる「ちりやく問答」の現存本『わたなべちりやく打』(寛文五年・八文字屋板)の初段冒頭では、宗親の乱の終結が語られるが、宗親はこの後公卿に命を助けられ、その時謀反を起こした広田入道に一味する。そこで残った子四天王達は苦難の末、一人武者の敵とこの宗親を討ち果たすのである。従って『わたなべちりやく打』は一人武者の弔合戦になっているともいえる。但しこの一人武者も「たけち合戦」の先行作である「北国落」や「紫野合戦」では、目立った活躍もしない脇役であった。

金平浄瑠璃では一般に、戯曲内容の面でいつも中心となるのは武綱と金平の二人である。智の武綱・勇の金平の対立葛藤という事が多くの作品で繰り返し語られるが、これが金平浄瑠璃の重要な性格になる事は既に指摘されてきた事である。[7] 智と勇を武綱と金平に代表され、役柄が明確に作り出されなかった他の子四天王達は、それ故に先に殺されたともいえるが、連作はこうした人物の打ち続く死をめぐって展開したともいえよう。その後の作品では武綱も討死し、更に金平までもを殺し、遂に連作も終焉をむかえたと推定される。

また作品の連続性という事からすれば、次々と登場してくる敵役達も重要である。[8] 川瀬宗親のように二作品に連続して登場する者もおり、「北国落」と「紫野合戦」のように親子二代にわたって謀反を起こす者もいたからである。そしてこのような脇役的な人物が、当時の他の連作物浄瑠璃においても作品の連続性という面で重要な働きをしていた事は、先稿で指摘したことである。従って子四天王物においても、これらの人物の名が作品によって変わる事なく、子四天王の名称も連作内では一系統であったであろう事も、連作として語られていた当時としてはむしろ当然の事であったのかもしれない。

さて、子四天王物の連作がこのように「末宗系」の一系統であったとすれば、「紫野合戦」の甲本のような「末春系」の作品はどのように連作と関わっていたのであろうか。

先に「たけち合戦」の続篇として『わたなべちりやく打』があると述べたが、実はもう一つ別の続篇がある。それが「末春系」の名称をもつ『武知三浦一二のあらそひ』である。この本は寛文初年刊行と推定される上方板であるが、これが「たけち合戦」の続篇である事は、『わたなべちりやく打』と同様初段冒頭で川瀬宗親の叛乱の終結が語られることからも判る。但しこの作品では宗親はすぐに首を斬られ、その子供である川瀬源太是親が謀反を起こす事を主内容としており、宗親が生き延びて再び逆心を企てる『わたなべちりやく打』とは全く別の続篇となっている。従って「たけち合戦」の

続篇として別の内容の二作品があり、それら二作品の間で子四天王の名称に系統的な相違があったことになる。

更に武綱の死を語る作品にも、内容の異なる二つの作品が残る。一つは（表）にもあげた『武綱さいご』（丹波少掾正本・うろこがたや板）であり、[9] この作品では九州の上原大膳時勝の乱の追討に向かった武綱が、備後鞆の浦で時勝の郎党に討たれる。もう一つの『きんひらどうしんの事』では、金平が主君と争い仏道修行に出た跡に、能勢民部勝村が都に攻め上り、これを迎え討ちに出た武綱が丹波境の老の坂で討死するのであり、『武綱さいご』とは別の物語になっている。

そしてこの二つの作品においても、名称の系統が違っていたと推定される。『武綱さいご』の方には死んだ子四天王の名が記されてなく系統は明らかではないが、他の作品との連関性から考えて「末宗系」に属するのではないかと考えられる。一方『きんひらどうしんの事』の初段には、「既に貞景、末春、一人武者三人は打死して」とあり、「末春系」である事が判る。

またこの二つの武綱の死は、ほぼ同時期に語られていたと考えられる。『武綱さいご』は一連の連作として万治四年二月以前には語られたのであろうが、『きんひらどうしんの事』も万治四年四月頃に語られたと推定される。それはこの『きんひらどうしんの事』には先行作として『公平花だんやふり』という作品が残り、これが万治四年四月に京の鶴屋から刊行された本であるからである。現存するこの二つの正本の板式や挿絵の様式が一致する事は、正本集の解題でも指摘されている。

このようにみてくると、「末宗系」と「末春系」が「紫野合戦」のように同一内容の作品をもつ事もあるが、内容の異なる続篇がある場合、名称の系統を異にしているのではないかと考えられる。そして現存本をみる限り、一連の連作とできるのは「末宗系」の系統であり、「末春系」の作品では子四天王物の連作全体を再現できない。

「末春系」ではむしろ「末宗系」の連作を借り、それを利用して独自な作品を作ろうとしていたのではないかと推定される。例えば『きんひらどうしんの事』には、頼光の墓が紫野にある事が語られるが（第三）、これは一連の連作の中に入る「紫野合戦」で描かれていた事である。また末武の子についても「小田原の合戦に打死せし末春」と記されるが（第六）、「末宗系」の連作である「やはぎ合戦」では確かに小田原の合戦で末武の一子、末宗が戦死していた。従って『きんひらどうしんの事』も、少なくとも一連の連作の内「やはぎ合戦」までの連作をふまえて作られていた可能性が強い。また「紫野合戦」のように「末宗系」と同内容の作品が作られる場合でも、その作品をふまえて別の続篇を作ろうとしていたのではないかと考えられる。連作として語る為、登場人物の名称を統一する必要があり、同内容で名称を変えた作品も作ったのではないだろうか。

以上の事から判断して、「末宗系」と「末春系」の間では連作態度にも相違がみられるように思える。一連の連作を語ったのはやはり「末宗系」であり、「末春系」はそこから枝分れするようにして作品を作っていたのではないかと考えられるのである。

四

この章ではこうした子四天王の名称に系統的な相違が起こる背景について考えてみたい。

この問題を考える上では、初期から存在した三系統の内、今まで

殆どふれてこなかった「末重系」の作品が手掛りとなるように思える。金平の名を「金吉」とするこの「末重系」の正本には先述した『天狗羽討』以下数種が知られているが、この系統の作品が上方の伊藤出羽掾の語ったものであることは既に知られている事である。[10]とすれば、「末宗系」や「末春系」という名称の系統的な相違も、語った太夫の違いと考える事ができるのではないだろうか。

そこで改めて語った太夫に注目して伝存する正本を検討してみたところ、「末宗系」とした正本で太夫の判明する正本は、江戸の和泉太夫と、上方の大和少掾の二人のものである事が判ってきた。連作に入る作品では、「北国落」「やはぎ合戦」「天狗もんたう」「武綱さいこ」の現存正本に、和泉太夫(丹波少掾)の正本が残り、また『わたなべちりやく打』は大和少掾正本であった。またこの連作には入らないが『頼義長久合戦』(仮題・寛文三年五月頃)と『金平物語』(寛文六年正月頃)も、「末宗系」の丹波少掾正本であり、『長久合戦』の上方板である『公平生捕問答』(寛文三年五月)、及びその続篇である『公平かぶとろん』(同年六月)も「末宗系」の名称をもつ上方板で、大和少掾正本と推定される。

そこで「末宗系」は和泉太夫か大和少掾の系統ではないかと考えられるが、この二人の太夫の関係についても「北国落」の現存本から知る事ができる。「北国落」には万治三年六月刊の和泉太夫正本が残るが、その後の寛文初年頃にこれと同内容で、「掛物揃」を加える等一部改訂した『よりよし北国落付かけものそろへ』が、京の山本九兵衛から刊行される。この本には太夫名はないが、『古播磨風筑後丸』にこの作品が入っており、また『今昔操年代記』にもこれが播磨掾の語り物の中に数えられている事から、大和少掾(後の播磨掾)の正本ではないかと推定される。

従って「北国落」を含め「末宗系」の作品は、まず江戸で和泉太夫が語り、その後上方に入り大和少掾が語ったのではないかと考えられる。そうすると子四天王物の一連の連作を語ったのは和泉太夫という事になり、室木氏が先に指摘されていた事にも符合する。

それでは「末春系」を語った太夫は誰かという事になるが、まず「末春系」の現存本を整理してみたい。

〔江戸板〕

四天王むしや執行	万治二年七月
四天王紫野合戦	寛文頃

〔上方板〕

公平末春いくさろん	万治三年三月	大和少掾
三田八幡之由来	万治三年頃	
公平花だんやふり	万治四年四月	虎屋小源太
きんひらどうしんの事	万治四年四月頃	
武知三浦一二のあらそひ	寛文二年頃	
公平関やふり	寛文二年七月	
渡辺綱三田合戦	寛文三年九月	

これをみると「末春系」が万治年間から寛文初年頃までの僅か数年の間に正本が集中している事が判る。また上方板が多いのも特徴であるが、子四天王物の現在する初作である『四天王むしや執行』が江戸板であるところから、江戸でも古くから語られていたものと考えられる。

この「末春系」には、和泉太夫と確定できる正本は一本もない。『四天王むしや執行』にも太夫名はないが、これも和泉太夫のもの

ではないらしい。和泉太夫の正本は、巻頭の内題のあるべき所に、「江戸和泉太夫正本也」と大きく記し、下に壺形の印を入れるという他にはみられない特徴を持つが、『むしや執行』にはそれがない（安田富貴子氏「頴原ノート古浄瑠璃資料抄」）。

そうなると「末春系」を語ったのは、やはり和泉太夫以外の太夫ではないかという事になるのであるが、「末春系」の現存本で太夫名が判明するのは二人だけである。まず大和少掾であるが、彼は「末宗系」の作品も語っていた。この大和少掾は後の浄瑠璃にも大きな影響を与える有力な太夫であるが、先稿でも指摘した様に、この頃は金平物以外の浄瑠璃でも江戸の作品を殆どそのまま語るという傾向が強い。従って「末春系」を語り初めた太夫としては、彼の名をあげる事はできない事になる。

残る一人の虎屋小源太を手掛りとする以外にはないようである。彼は万治四年頃に上方で『公平花だんやふり』等を語った太夫であり、その連作が和泉太夫のものと考えられる一連の連作とは内容を別にしていたのである。また水谷不倒氏の記録（浄瑠璃絵入本所在目録）に、小源太夫の正本として『四天王やはぎ合戦』があった事が記されている。この本が京版とされている所から、この頃に小源太夫が「やはぎ合戦」も含む連作物を、上方で上演した可能性もある。(11)

そこでこの虎屋小源太夫が「末春系」の太夫ではないかと疑われるのであるが、この太夫の詳細はよく判らない。先学の指摘されている事も参考にして整理すれば、(12) (1)薩摩浄雲系の江戸の太夫で、虎屋源太夫の弟子ではないかという事、(2)この太夫が後に永閑と称する太夫ではないかという事、(3)永閑の名がみえるのは今の所寛文九年が最初であるから、小源太夫の名はそれ以前に使われたのではないかという事、(4)虎屋永閑の弟子にも小源太夫という太夫がいるが、これは今問題にしている小源太夫とは別人で、永閑が自分の前名を弟子に与えたのではないかという事、等となる。

こうした事をふまえて、「末春系」を語ったのが小源太夫も含めた虎屋源太夫系ではないかと考える事のできる手掛りが別にもう一つある。それは親四天王時代の浄瑠璃『四天王若さかり』である。この作品の現在本としては元禄初年の再刻本が残るだけであるが、『大和守日記』にも書名が記載されている所から、元版は万治頃の刊行で、外題は「四天王頼光勇力諍」で虎屋源太夫正本であった事が推定されている（『金平浄瑠璃正本集』第二解題）。

ところでこの作品の内容をみてみると、これが四天王物の嚆矢とされる明暦四年刊の『うぢのひめきり』と非常によく似ている事に気付く。題名に関係する初段の内容や、叛乱者の名前等に相違がみられ、詞章も異なるのであるが、事件の展開、人物の関係等は殆ど一致しているといえる。東国で叛乱が起き、頼光や四天王等が討伐に向うが、その留守の間に都でも叛乱が起こり、頼光の奮戦にも関わらず帝が捕えられる。東国の乱を鎮圧した四天王達は帰洛途上で都での反乱を知るが、兵達が逃亡してしまう。都では帝が殺されようとするが、頼光等が危うく救出し、叛乱軍と戦い遂に勝利をおさめる。こうした物語展開が二つの作品に共通する。金平浄瑠璃が類型的であるといっても、これ程までに筋立てが同一になることは他にみられない。

また『四天王若さかり』には続篇として『渡邊がんぜき割』という作品があり、この現存本が挿絵や板式からみて万治元年頃の刊行と考えられる所から、この『四天王若さかり』も『うぢのひめきり』

とほぼ同時期に語られていたことになる。

ところがこの二作品には気になる異同がみられる。それは都に残って防戦する頼光の弟の名であり、『うぢのひめきり』では頼信とあり、『四天王若さかり』では頼親とある。源氏の系図の上からはこの二人は共に頼光の弟であるが、和泉太夫が語ったと推定される一連の連作では、この頼親は頼光の嫡子として登場し、しかも跡目の争いに破れた叛乱者として描かれる人物である。[13] 従って頼親を頼光の弟とする『四天王若さかり』は、後の一連の連作にはつながらず、和泉太夫とは別の系統と思われ、それを語ったのが虎屋源太夫であったのである。

源太夫という太夫がこのように四天王物の浄瑠璃が始った頃に、和泉太夫の作品とほぼ同じ筋立を持ちながらも別系の作品を語っていたとすれば、その弟子とされる小源太夫が和泉太夫と別系の作品を語っていた事にも結びつく。こうした事を考え合わせると、「末春系」は虎屋源太夫系の太夫達が語ったものと考えてもよいのではないかと思われる。[14]

さて、それでは和泉太夫系と考えた「末宗系」と、源太夫系ではないかとした「末春系」の先後関係はどのようになっていたのであろうか。

この問題は資料の少ない現在では非常に難しい問題であるが、現存本からみる限りでは源太夫の「末春系」が先行しているようにみえる。江戸でも子四天王物の初作は「末春系」であったが、特に上方では万治年間のものは「末春系」が主であり、それに伊藤出羽掾の「末重系」が混在する。上方で確実に「末宗系」がみられるのは寛文に入ってからであり、和泉太夫の丹波少掾受領(寛文二年八月)の折の上洛以後ではないかとも考えられる。それ以前は、万治二年の薩摩太夫の上洛(先稿(注14)参照)や、同四年の虎屋小源太夫の上洛の折に「末春系」が、上方へもたらされた可能性があろう。大和少掾もはじめは「末春系」の作品を語っていたのであり、寛文に入ってから「末宗系」の作品を語るようになる。また万治三年頃に既に子四天王の二人が死んでいる『公平末春いくさろん』のような作品も語られるのであるから、やはり「末春系」が先行していたように思える。

しかしこうした推定は現存本を主にしたものであり、しかも正本の刊年を上演の時期と一致すると仮定した上での事である。和泉太夫のものと考えられる一連の連作も、『大和守日記』の記述からみて万治四年四月以前にはほぼその全容が語られている。また『北国落』の刊行される万治三年六月以前にも、その一部が既に上演されていたのかもしれない。

こうした事からも両系の先後関係は必ずしも詳らかではないのであるが、和泉太夫が連作として語り出すと、四天王物における彼の優位は次第に確かなものになったのではないかと考えられる。彼には岡清兵衛という作者もついていたが、何よりも浄瑠璃は語るものであり、和泉太夫の語りはこうした荒々しい内容を語るに適していたのであろう。

従って四天王物の浄瑠璃で、たとえ源太夫系が先行していたとしても、和泉太夫による一連の連作が語られると、それが強い影響力をもち、その後は源太夫系も和泉太夫に追随する事になったのではないかと考えられる。それでも子四天王の名を一つの系統に統一できなかったのは、それぞれの太夫が互いに連作として語っていた為

であろうが、またその事が各太夫の子四天王物における一種の自己宣伝になっていた為ではないだろうか。

五

ここまで脇役とされてきた武綱・金平以外の三人の子四天王の名称を手掛りにして、創成期の金平浄瑠璃について考えてきたが、実はまだ問題が残っている。

その問題というのは、子四天王物の名称を太夫の別と考えたことに関係する問題である。ここまでは和泉太夫の系統を「末宗系」と考えてきたが、寛文以後の彼の正本をみると「末宗系」でないものが数多く存在する事が判ってきた。延宝六月正月刊の『あたご山大合戦』に至っては、別系と考えた「末春系」の名称と一致している。これでは名前の系統を太夫の別としてきた仮説が全く間違っていた事になる。確かに万治頃には三系統に整理できるようであるが、その後はこうした三系統で考える事ができない程の混乱をみせる。この問題を考える為には、和泉太夫正本も含め、子四天王の名称がその後どう変遷していったかという事を、金平浄瑠璃全体で考える必要があろう。

そこで寛文以後の名称の変遷を整理してみた結果、一見無秩序にみえる混乱も、それぞれの時代の中では規則的である事が判明してきた。またそうした変遷が単に名称の異同という事に留まらず、金平浄瑠璃のその後の展開にも関係する事が判ってきた。

まず最初の混乱は寛文の初め頃に起こる。寛文二年七月の京・鶴屋板の『四天王高名物語』(和泉太夫口伝正本)では、碓氷貞光の名前で混乱が生じている。卜部末武の子の名前は末宗とありながら、貞光の子が「末宗系」の貞兼ではなく、「末春系」の貞景になっているのである。以後もこのように末宗・貞景とする作品が数多くみられる為、この系統を「第一次混乱系」と呼んでおく。

『四天王高名物語』は上方板であったが、この「第一次混乱系」が上方で始ったのではないかと推定される根拠がもう一つある。それは寛文二年三月刊の『子四天王北国大合戦』であり、これは「末重系」の作品で金平を金吉としながらも、貞光の子をそれ迄の重貞から貞景に変えている。

こうした混乱が上方でおこるのも、この時期に「末宗系」が上方に入ってきた為ではないかと考えられる。上方では万治頃までは「末春系」が主であり、後から入ってきた「末宗系」が、以前からある「末春系」の名に引かれて混乱が生じたのではないか。「さだかね」と「さだかげ」では一音の相違で母音も共通する。

またこうした混乱の背景には、子四天王物の連作が一応終結したという事があるように思える。「公平さいご」が語られるのは寛文二年七月頃と推定されている。[15] 主役の金平を殺して金平浄瑠璃も重大な転機をむかえた。金平が死ぬのは八幡太郎義家の時代であり、この時代を背景とした奥州攻めの浄瑠璃は既に万治頃には語られていた(先稿参照)。これ以上四天王物の連作は続けられなくなってきたが、金平の人気は続いていたのであろう。そこで一度殺した金平等を再び生き帰らせて舞台に登場させたものと思われる。こうした時期に和泉太夫は受領の為に上京していた。上方で混乱がみられる時期は、このような金平浄瑠璃自体の転機ではなかったかと考えられる。

上方ではこの後、寛文三年九月刊の『渡辺綱三田合戦』以後「末

春系」は姿を消し、「第一次混乱系」の作品を残すようになる。これが江戸へ波及するのは、現存本で確認できる範囲では寛文末年という事になる。江戸鱗形屋板の『公平つるぎのりつくわ』は、寛文五年の上方板『源平へんげあらそひ』[16]の復刻本であり、「第一次混乱系」の名称をもつ。上方の混乱が江戸へも入ったものと思われる。

第二次の大きな混乱は延宝に入っておこる。今度は末武の子の名で混乱が生じ、「第一次混乱系」で「末宗・貞景」とあった名が、「末春・貞景」となる。これは一見すると「末春系」と全く同じと考えられ、和泉太夫の『あたご山大合戦』にもみられたものである。が、詳細に検討すると、これも「末春系」とは別系統である事に気付く。そこでこの系統を「第二次混乱系」と呼んでおく。

これが「末春系」と同一でない事は、一人武者の子の名前から知る事ができる。この一人武者については、ただ「一人武者」と記される事も多く区別が難しいのであるが、「第二次混乱系」に属する『公平入道山めぐり』に一人武者の子として「清氏」とみえる。ところがこの名は「末宗系」「末春系」に共通して、孫四天王の名として使われていたもので、それが子四天王の名と混乱したものと考えられる。この混乱は「第一次混乱系」の『公平牛鬼責』(寛文末～延宝刊)で既にみられたものであった。

では「第二次混乱系」のように、「末宗」と「末春」の名がどうして混乱したのであろうか。音も共通しない上、「末春」という名は長い間使われていなかったものである。これも間に孫四天王の「貞春」を入れて考えると、ある程度推測が可能である。子四天王と孫四天王の名で混乱を生じるのは一人武者の場合でみた通りであるが、この場合は末武の子で「貞春」との混乱を生じ「末春」となったのではないかと考えられる。この事は以後孫四天王の名が「貞春」から「貞丸」に変ってしまう事からも推察される。

そしてこうした混乱が起こる背景にも、金平浄瑠璃自体の変質があるように思える。寛文期にはまだみられた連作も、延宝に入ると殆どなくなり、作内容の面でも金平一人が中心になる傾向が強くなってくる。金平と武綱の対立も葛藤を生み出すものにはならず、他の子や孫の四天王に至っては、単に名を連ねるだけの存在になっている場合が多い。寛文期には上方の大和少掾や出羽掾も盛んに四天王物を語っているが、延宝期に入るとこの種の浄瑠璃を語るのは殆ど和泉太夫だけになり、しかもこの頃に和泉太夫の世代交替も行なわれたものと考えられる。[17] そして金平中心の単純化を押し進めたのが、この二代目の和泉太夫ではなかったかと推定されるのである。

さて、この「第二次混乱系」も現存本では四作品を残すのみで、延宝末から天和・貞享頃の七・八年間にみられるにすぎない。以後主流となるのは「第一次混乱系」の変型系である。孫四天王の一人を貞丸に、子四天王の一人武者を清氏にする変型をもつが、基本的には「第一次混乱系」に近い系統が、以後元禄に至るまで作品を残している。

以上が寛文以後におこる子四天王の名称の変遷の概略であるが、まとめてみると、(1)寛文二年頃に上方で混乱が起こり、貞光の子が貞景になり、以後この名が定着する(第一次混乱系)。(2)この混乱が寛文末迄には江戸に入り、一人武者の名を孫四天王の名と混同するようになる。(3)延宝に入ると末武の子の名で混乱を起こすが(第二次混乱系)、これは短かく、(4)以後貞光の孫の名を変えながらも、基本的には「第一次混乱系」で元禄まで作品が作り続けられる、という

事になる。そしてその背景には金平浄瑠璃そのものの変質があり、その中での脇役のしめる役割の変化があったものと考えられる。

さて、このように子四天王の名の混乱が、時代と共に変わる規則的なものであった事が判ってくると、和泉太夫の場合も万治頃には「末宗系」であったと考えてもよいのではないかと考えられる。また万治頃の三系統を太夫の別と考えた事にも矛盾は生じない様である。更に和泉太夫自身が寛文以後には混乱をみせていたという事実から、金平浄瑠璃において彼一人が独占的な地位をしめていたのではなく、「末春系」の太夫達もかなりの影響力を持っていた事が窺えるように思える。

またこうした名称の変遷を整理した事で、子四天王物の連作時期についても推定することができる。これら連作に入る作品の現存本の大多数が、後の時代の刊行であることは先に指摘した通りであるが、そうした本でも「末宗系」の名称をもっていた。例えば現存する『八幡太郎誕生記』は元禄頃の刊行であるが、この時期に新たに作られたのであれば、今述べてきたことからすれば変型の「第一次混乱系」の名称をもつ可能性が高い。ところが「末宗系」の名称をもつのであるから、この本には元版があり、その元版の刊行時期は名前に混乱をみせる以前と考える事ができるであろう。そしてその時期は「末宗系」では寛文六年以前であり、元版の刊行もここまでは溯れると考えられる。

更に『たけち合戦』の場合には、武知源太の名前から元版の刊行時期をもう少し限定できるかもしれない。現存本の刊行は貞享頃であるが、武知源太の名がこの正本だけ「安氏（やすうじ）」となっている。彼の名は他の作品では系統に関係なく「安元（やすもと）」とある。但し、この名も万治三年頃には定着していなかった可能性がある。万治三年刊行の「末重系」の『天狗羽討』では「安方」とあり、同年刊行の「末春系」の『公平末春いくさろん』では「安元」とあるからである。武知源太はこの『たけち合戦』の主役であり、貞享頃に復刻するなら名前を流布している安元に変えることもできたであろうが、それをやっていない。従って貞享頃刊のこの本は元版に比較的忠実であり、その元版の刊行は万治三年三月頃からそれほど遠くない時期であったと考えられるのではないだろうか。[18] そうすると『たけち合戦』の元版は『北国落』とほぼ同時期に刊行されたという事になる。

勿論これは名称の上の事だけで、その内容が元版と一致していたかどうかは判らないであろう。が、元版をみる事ができない現在、その元版の刊行時期を推定する一つの内部徴証にはなり得よう。従来は『大和守日記』という外部徴証のみで連作時期を推定していたが、それを支える事にもなるのではないかと考えられる。

ここまで述べてきた事をまとめてみると、ほぼ次の様な事が推定される。

一　子四天王物の浄瑠璃には、それが語り始められた頃から作品によって子四天王の名が相違し、三系統に分かれる。

一　その名称の相違は語った太夫の違いと考えられ、それぞれ和泉太夫、虎屋源太夫、伊藤出羽掾の系統とできる。

一　創作法としては系統に関わらず連作が用いられたが、中でも和泉太夫が万治頃に語った一連の連作が大きな影響力を持った。

一　源太夫系と考えられる系統も、子四天王物に関してはむしろ和

泉太夫に先行した可能性もあるが、和泉太夫の連作後はそれに圧倒された。

一　しかし源太夫系も独自な活動は暫く続け、特に万治期の上方には大きな影響を与えた。

一　寛文以後になると、こうした太夫による名称の相違はみられなくなり、名称自体も混乱するようになるが、その混乱も金平浄瑠璃自体の史的変遷と関連したものであった。

六

ここまで子四天王の名称を手掛りとして、創成期の金平浄瑠璃の実態という事を考えてきたが、最後に金平浄瑠璃における連作の意義ということについて考えてみたい。

従来の金平浄瑠璃論も、戯曲構造の分析という面では和辻哲郎氏以来かなりの成果をあげてきたと考えられるが[19]、作品相互の有機的な繋がりという事には殆ど目を向けられる事がなかった。唯一のこの種の研究に室木弥太郎氏の論考があったのであるが、室木氏自身も金平物の意義という事になると戯曲構造の面から述べておられるようである(前掲書)。勿論、金平浄瑠璃は戯曲構造の面においても画期的なものであったと考えられるのであるが、そうした作品を作り出した連作の意義、更にその連作で作られた作品群全体の意義という事もまた考えてみる必要があるように思える。

まず、この戯曲構造という事にも直接関係する、武綱や金平の役柄という事が連作の過程で形成された、という事が考えられる。

明暦四年刊の『うちのひめきり』や、同時期に語られたと推定される『四天王若さかり』などの親四天王物においては、専ら活躍するのは源頼光で、四天王の間には特に役柄の相違というものはみられない。またそれから二年半後の万治二年七月刊の『四天王むしや執行』においても、初めて登場してきた五人の子四天王が等しく取り扱われており、武綱や金平が特に活躍するわけではない。但しこの作品で語られる親四天王の扱い方の中に、役柄形成の萠芽があるように思える。この『むしや執行』の初段には、

さるにより五人の者共、先年正次入道が毒酒にて三人は相果て、残る金時、渡辺許

とあり、先行作(正本は現存しない)で親四天王の内三人が死んでいた事が判る。そして残る綱と金時も、この作品の五段目で討死する。即ち親四天王の死を描くのに、他の三人は先に殺し、綱と金時の二人は別に扱っていたのである。

こうして綱と金時が他の三人と区別されると、その後のごく短い間に武綱と金平の役柄が形成されたと考えられる。現存本で確認できる最初は、『むしや執行』の刊行から八ケ月後に刊行された『公平末春いくさろん』である。この作品では、金平の「我儘」や「拗ね」、それに超人的な「勇力」といったものが語られ、また武綱にも金平の行動を「諌め」、冷静に状況を判断する「智謀」が備わっていた。

もっともこの『公平末春いくさろん』では子四天王の内二人が死んでいたのであり、これに先行する作品があったと考えられる。そしてそうした先行作の中で役柄が作り出されていたと考えられる。それを語り始めた太夫が誰であるかという事になると、「末春系」と「末宗系」の先後関係という事になり、本稿でも述べてきたように現在では判らないという他はない。ただ『むしや執行』が源太夫

系と推定される事もあり、虎屋源太夫等が役柄形成という事にも関与していた可能性がある事だけは指摘しておきたい。

但し誰が語り始めたとしても、武綱と金平の役柄は、すぐに四天王物を語る大多数の太夫の取り入れる所となったのであろう。万治三年刊行で現存する三系統の作品では、人物の名称に相違はみられるものの、この二人の役柄は既に明確になっているのである。

このようにみてくると、武綱や金平の役柄は、万治二年の後半から三年の初め頃の親四天王物から子四天王物へ移り変る連作を語る中で形成されたのではないかと考えられる。子四天王を生み出す過程は、同時に役柄を作り出す過程でもあった。そしてそれが連作という方法で作り出されたと考えられるのである。和泉太夫の一連の連作も、こうした役柄が既に作られた後に語られたと推定される。『北国落』には年若い子四天王が登場するが、「又金平の例の我儘いてたり」等とあるからである。武綱と金平の役柄が形成された事で、他の三人は脇役にまわる事になったのであろうが、一連の連作がこれらの人物を殺す事で作り出されていた事は、本稿で述べてきた通りである。和泉太夫の連作が、単なる親四天王物の後日譚でない、独自な作品群を作る事ができたのも、こうした役柄が形成されていたからではなかろうか。

さて、ここまで連作の意義として役柄形成という事を考えてきたが、次に作品群全体としての意義という事を考えてみたい。が、このことは既に先稿において連作物の意義として述べたことである。

それはこの当時の浄瑠璃が、連作という形をとる事によって一曲では語る事のできない大きな状況を語る事を可能にしたという事である。金平浄瑠璃の場合においても、作品相互の連関によって親四天王から子四天王、更に孫四天王に至る時代の流れが語り出されることになっていた。それは度重なる叛乱によって四天王代々が討死するが、そうした郎党等の犠牲によって国の秩序が護られてきた、というような一種の長篇の軍記物を形成することになっていたと考えられる。そしてその時代は、満仲から頼光、頼信、頼義、更に八幡太郎義家に至る源氏の五代の時代であった。

勿論、先稿でも指摘した様に連作として大きな状況を語り出すという事は、金平浄瑠璃に限らず、万治期の連作物浄瑠璃に共通してみられる特色であった。金平浄瑠璃が他の連作物と異なる意義をもつとすれば、それはこうした大きな状況を浄瑠璃が自らの手で作り出した、ということにあるのではないだろうか。

また本稿でもみてきた様に、このような四天王物の全体像は万治三年を中心としたごく短い期間に形成されたと考えられる。そしてこれを語り出した太夫も、和泉太夫一人ではなかったであろう。子四天王の名称に系統的な相違がみられたのはこの時期であり、その名称の異同は太夫の違いと考えてきたのである。親四天王物から子四天王物に展開していくもっとも重要な時期に、「末春系」を語ったと推定される虎屋源太夫等の太夫が関与した可能性は大きい。子四天王物の一連の連作が和泉太夫の語ったものであり、その背後に作者、岡清兵衛がいたとしても、その連作が語られる前後に虎屋源太夫もまた活発な活動をしていたと推察される。従って源太夫や和泉太夫等の太夫が競合しあう事によって、四天王物の全体像も形成されることになったのではないかと考えられるのである。

先稿では「秀平三代記」や「為朝一代軍記」等の連作物の浄瑠璃を語った太夫として、薩摩外記系の太夫がいたことを述べた。そし

て和泉太夫や源太夫、外記等がいずれも江戸の太夫で薩摩系に属する同系の太夫であったと考えられる。従って金平浄瑠璃を含む連作物浄瑠璃は、江戸の地で万治三年頃にこれら同系の太夫達によって語られ始めたと推定されるが、この動きは直ちに上方にもたらされ、浄瑠璃界の一つの大きな流れとなったのではないかと思われる。

また連作物が単に短期間の小さな動きではなかったであろう事は、この時期に連作として作り出された時代背景や人物関係といった大状況の枠組が、その後の浄瑠璃作品の基盤となったと考えられる事からも推定される。金平浄瑠璃の場合も、金平を殺して重大な転機をむかえた際、一度殺した四天王等を再び生き帰らせるという形で作品を作り続けたのであるが、そうした作品での時代背景や人物関係は、万治期の連作が作り出したものを用いていたのである。

創作法としては寛文末頃まで連作という方法が用いられたようであるが、寛文以後には万治期の連作のように大状況を作り出すものにはならなかったようである。寛文初年頃に子四天王の名称に混乱がみられたのも、こうした連作としての性格の相違という事が背景にあったように思える。役柄が明確に作り出されなかった三人の子四天王等には、万治期の連作の時のように状況を作り出すような役割すらなくなった為と考えられるからである。但し、武綱や金平で作り出された役柄が親の綱や金時にも与えられるようになり、親四天王物の浄瑠璃において『頼光跡目論』のような作品を作り出す事をも可能にしたのではないかと推定される。

以上のようにみてくると、本稿で取り扱った万治三年頃の時代は、金平浄瑠璃の創成という事で重要であったばかりでなく、古浄瑠璃史の上でも新たな展開をみせる激動の時代であった。金平浄瑠璃のこの時期の活況も、一見小さな異同のようにみえる子四天王の名称の相違を手掛りとする事によって、少しは明らかにする事ができたのではないかと考えている。

注

(1) 例えば『頼光跡目録』について、初めは万治四年以前の連作に入るとされているが、後にはこれを改めておられるようである。

(2) 甲本は寛文頃、乙本は元禄頃の刊行と推定される。

(3) 『てんぐのはうち』の刊行から一ヶ月後の万治三年四月にも、山本九兵衛からほぼ同内容の『天狗羽討』が刊行される。両本共に伊藤出羽掾正本。

(4) 『北国落』以外には『やはぎ合戦』(和泉太夫正本)が万治頃の刊行と推定されている。他に『よりちか二どのぎやくしん』も万治四年の刊行であるが、これは上方板であり、この本より前に刊行された江戸板があった事が推定される。

(5) 「紫野合戦」の伝本として、本稿で取り上げた本と別に、山城少掾旧蔵の元禄頃刊の鱗形屋板があった事が正本集の解題で紹介されている。この本の原本は失われたが、第一丁の写真が残るという事で(未見)、正本集によれば和泉太夫正本で乙本の本文と殆ど一致するという事である。本稿第四章で、この一連の連作を和泉太夫のものではないかと推定したが、この事からも乙本系、即ち「末宗系」を和泉太夫の系統と考える事が支えられるのではないかと考える。

(6) 子四天王物の浄瑠璃では、子四天王・一人武者と並んで、武知源太と三浦和田左衛門も重要な人物である。世代的には子四天王と孫四天王の間という事に設定されており、この両世代の間をつなぐ役割を果たしている。

(7) 従来の金平浄瑠璃論でこの事にふれないものはまずない。中でも鳥居フミ子氏「金平浄瑠璃の脚色法」(「近松論集」第六集)は、金平浄瑠璃全般を謡論体という面から考察されたものである。

(8) 中野三敏氏蔵の『四天王揃』は、金平物に登場する人物達を集めた絵本である（『古浄瑠璃正本集』第十所収）。そこには親子の四天王等と共に、多くの敵役達が描かれている。ただ残念な事に、私がもっとも知りたい子四天王等が描かれていたと思われる丁（三ウ・四オ）が落丁しており、別の箇所で「末宗」の名が一箇所みえる以外、その名を知る事ができない。

(9) 「武綱さいご」には江戸板の丹波少掾正本以外に、上方板の『源氏つくしかつせん』も現存する。上方板には鎌倉権五郎が全く登場せず、また厳島八景の景事をいれる等、江戸板と相違する点もみられるが、内容は両本殆ど同じである。

(10) 伊藤出羽掾の作品としては『天狗羽討』以外に、寛文二年頃迄に『藤井寺おち四天王最後』と『綱金時最後』の連作、及び『頼光くもきり』『子四天王北国大合戦』の連作等がある。これらの作品は登場人物の名称だけでなく、作内容の上でも独自な面がみられ、同じ江戸の影響下にあっても大和少掾とは作品の作り方が相違する。室木弥太郎氏「伊藤出羽掾と公正浄瑠璃」（『近世文芸』七）参照。

(11) 『新群書類従』第九に「やはぎ合戦」が翻刻されているが、これが水谷氏のいわゆる旧東大本であるかどうかは詳らかでない。但し新群書類従本は「末宗系」の本であり、現存する和泉太夫正本と同内容である。もしこれが小源太夫正本であれば「末春系」の太夫として小源太夫と考える以下の論と矛盾する事になる。現在はこの本の刊年や板式も判らないので、一応別本と考え、問題点の一つとして保留しておきたい。

(12) 『金平浄瑠璃正本集』第一解題、『演劇百科大事典』信多純一氏解説等。更に「三浦家文書を読む会」第三回例会（昭和五十九年三月二十五日）において、阿部千栄子氏より虎屋源太夫に関する詳細な報告がなされ、それも参考にさせて頂いた。

(13) 『やはぎ合戦』と『よりちか二どのぎやくしん』は、頼親の叛乱を内容とする連作である。また『頼光跡目論』は頼信と頼親の跡目争いを内容とし、他にも頼親を主役とする『よりちか童子』（阪大蔵・零葉）という作品もあった。

(14) 小源太夫が後に永閑と称するのであれば、永閑の正本『小子天王始』も検討する必要があろう。この本も元版は万治頃に刊行されたと推定されるが、子四天王の名は「すくねの悪太郎」のように幼名で、系統の別を明らかにできない。但し『みたの源次郎』の名が『四天王むしや執行』と一致する等、「末春系」の作品と考えて起こる矛盾はないようである。またこの作品は「末重系」の『四天王最後』等にも影響を与えたと考えられる。

(15) 「公平さいご」には江戸板は現存せず、二種の上方板が存在し、共に寛文二年七月頃の刊行と推定される。またこれに関連して、武綱の子の名が作品によって相違する事も問題となろう。二種の「公平さいご」や「武綱さいご」では武春武満とあるが、和泉太夫正本『すがはらのしん王』では国綱とある。しかしこの名が定着する以前に連作も終焉したのであろうし、第五章でも述べた様に、寛文二年頃には名称に混乱が生じたのではないかと考えられる。

(16) 『源平へんげあらそひ』の末武の子の名は、末宗・末春・末重の三系が混在しており、混乱がはなはだしい。

(17) 室木氏は和泉太夫の世代交替を延宝七年頃と推定されている（前掲書）。

(18) 『たけち合戦』で安氏とあった名が、その後安元となる理由も考える必要があろう。勿論「末春系」と混乱した可能性もあるが、むしろ『たけち合戦』の中に登場する父親の名が「安元」とあるので、それと混同したのではないかと考えられる。

(19) 和辻哲郎氏『日本芸術史研究』・青木正次氏「金平浄瑠璃の位置と金平の役割」（『日本文学』昭和三十八年十二月号）・今尾哲也「金平浄瑠璃試論」（『日本文学』昭和三十六年五・六月号合併号）等。

—本学文学部助手—